

顔面皮角ノ一例竝ニ其成因ニ關スル 組織學的研究補遺

岡山醫科大學第一外科教室（主任赤岩博士）

岡山醫學士

廣田吉太郎述

緒言.

皮角トハ皮膚ノ角層ノ異常増殖ニ基因スル疾患ニシテ、古來歐洲諸國ニハ多數其實驗例ノ報告ヲ見ルモ、我が國ニ於テハ余ノ寡聞其例甚ダ寥々タリ。而モ之ガ發生ノ初期ニ於ケル組織學的方面ノ研究ニ關シテハ詳述セル記載ニ乏シ。余ハ我が教室ニ於テ偶々顔面ニ一奇觀ヲ呈セル皮角ノ一例ニ遭遇シ、臨牀上ノ所見竝ニ發生初期ニ於ケル組織學的檢索ヲ行ヒタルヲ以テ茲ニ之ヲ報告セントス。

一 自家實驗例及ヒ皮角ノ臨牀的一般觀察.

（イ）自家實驗例.

患者. 江見某男. 77歳ノ農夫.

主訴. 左側鼻部ノ腫瘍.

既往症. 患者ハ生來健全ニシテ36歳ノ時結婚ス、配偶者ハ嘗テ黴毒ヲ患ヒント言フ、患者自身ハ44歳ノ時黴毒ニ感染セシト言フ.

本症ハ4年前左側鼻翼ノ中央部及ヒ顔面ヲ山中ニテ柴薪ノ仕事ニ從事セル際常ニ屢々樹枝ニテ打撲ヲ蒙リ、其當時ハ別段腫脹モ無カリシガ、間モナク該部ニ漸次疣狀ノ隆起ヲ生ジ、次第ニ増大シテ其根部ニ癢痒感アリシヲ以テ、患者自ラ之ヲ切取リタリ。然ルニ此疣狀物ハ再ビ増大スル傾向アリ。大正10年再ビ自ラ切除セシモ全ク治癒セザルノミナラズ、漸次延長増大シテ其尖端ハ角化ノ狀ヲ呈スルニ至リタリト言フ。然ルニ疼痛、熱發其他著明ノ困難症ナキヲ以テ其儘ニ放置セシガ、大正11年6月頃該腫瘍ノ左上方ニ更ニ1箇ノ同様ノ隆起物ヲ生ゼリ。之等ノ腫瘍ハ夜間ニ輕度ノ癢痒ヲ感ズト言フ。

現症. 體格、營養共ニ中等度。四肢ノ爪甲ハ肥厚シ縱溝アリ。時トシテ自然ニ脱落スト言フ。口腔粘膜舌等ニ異常ナシ。胸部竝ニ腹部臟器亦著變ナシ。脉搏正整、中等大、緊張ス。食慾可良、便通1日1乃至2行。睡眠ノ癢痒ノ爲メ屢々妨ゲラル。膝蓋腱反射尋常。ワツセルマン氏反應強陽性。

局所所見. 左側鼻翼ノ中央部ニ高サ約2.5厘、周圍6厘ノ角様ノモノアリ。其周圍ノ皮膚ハ肥厚シ紫藍色ヲ呈ス。其形鼻部ヨリ著シク突出シテ圓柱狀ヲ呈シ。尖端ハ不規則ニ分歧シ峻峯狀ヲナス。尙ホ其左上方ニ同様ノ像ヲ呈セル長サ約1.8厘、周圍5厘ノ隆起物アリ。之等ノ腫瘍ハ其色一般ニ黃褐色ニ

シテ硬度ハ軟骨ヨリ稍柔軟ナリ（第四圖及ビ第五圖參照）。尙ホ同側ノ眉毛部ノ外縁ニ於テ外眼角ノ附近ニ之等ノ腫瘍ノ初期トモ思ハルル褐色小指頭大ノ斑點アリ。該斑點ヲ精細ニ検査スルニ此部ノ皮膚ハ乾燥シ著シク肥厚シ。其表面粗糙ニシテ所々微細ナル角化様ノ小點アルヲ認ム（第四圖參照）。

手術並ニ經過。大正12年3月29日「バンカイン」局所麻酔ノモトニ皮角ヲ周圍ノ皮膚及ビ基底部分ノ皮下組織ト共ニ切除シ、創部ハ之ヲ全部縫合セリ。尙ホ皮角初期ノ組織的検索ノ目的ニテ左外眼角ノ附近ニ存セル斑點ノ一部ヲ切除セリ。創部ハ何レモ第一期癒合ニヨリ術後二週間ニシテ全治退院ス。

（ロ） 皮角ノ臨牀的一般觀察。

（1） 皮角ノ形狀及ビ大小。

皮角ハ其形圓柱狀、圓錐、鈍圓錐或ハ三稜形ヲ呈シ、其發生ノ初期ニハ、圓錐形ニ眞直ニ伸ビ、延長スルニ從ヒテ彎曲シ螺旋狀ヲ呈スルモノ多シ。或ハ又多少捻轉セルモノアリ、又 Rodriguez, Caurtois ノ例ハ其尖端分岐シテ樹枝狀ヲ呈スルモノヲ見タリ、表面ハ多クハ溝狀ヲ呈シ、不規則ニシテ凹凸狀トナリ平滑ナルモノ稀ナリ。其尖端ハ何レモ鈍ニシテ尖狀ヲ呈スルモノ稀ナリ。基底ハ深く皮膚ニ侵入セルヲ見ル。其大サハ種々ニシテ其大ナルモノハ Lebert ノ報告セル長サ2乃至4「ツオル」、Dubrandy 及ビ Alibert ノ報告セル、後頭部ニ發生セル21 糎ノ長サヲ有スルモノ及ビ Dumonceau ノ報告セル24 糎ノ皮角等ナリ。就中今日迄文獻ニ現ハレタル最長ノモノハ Home ノ報告セル30 糎ノ長サヲ有スル皮角及ビ Sutton ノ報告シタル、額面ニ生ジタル皮角ガ腮部迄下垂セル例ノ如キハ最モ稀有ナルモノニ屬ス。余ノ例ハ2 箇ノ圓柱狀ヲ呈セル皮角相竝立シ、其周徑一ハ6 糎、他ハ5 糎ニシテ其高サ一ツハ2.5 糎、他ハ1.8 糎ニシテ基底部分ト尖端部分トノ周徑ハ殆ド相等シク7 乃至8 箇ノ鈍圓或ハ樹枝ノ如ク分列セル像ヲ呈ス一見峻峯乃至奇巖ヲ見ル如キ狀アリ（附圖第一圖b 及ビc 參照）。

（2） 色調及ビ硬度。

皮角ノ色ハ通常黃色ニシテ不透明ナリ。又屢々褐色乃至黑色ヲ帶ブルモノアリ。稀ニハ光澤ヲ放ツモノアリ。硬度ハ一般ニ硬ク爪甲ニ比シ稍軟ナリ。内層ハ外層ヨリ軟弱ニシテ其硬度不均等ニシテ蠟脂様濕潤アリ。余ノ例ニ於テハ黃褐色ニシテ其硬度軟骨様ナリ。

（3） 發生部位、數、年齡及ビ性的關係。

皮角ハ多クハ50 乃至70 歳ノ間ニ發生シテ、男子ヨリモ女子ニ多キガ如シ。即チ Erasmus-wilson ノ集メタル90 例ニ就テ女子ニ發生セルモノ51 例、男子ニ

發生セルモノ 39 例ナルヲ見タリ。然レドモ例外トシテ幼兒又ハ幼年者ニ發生スル事アリ。余ノ例ニ於テハ 77 歳ノ男子ニ發生セルモノナリ。發生部位ニ關シテハ頭部及ビ顔面ニ發生スルモノ多シ之ヲ諸家ノ統計ニ徴スルニ Lebert ハ 109 例中頭部、顔面及ビ顙顙部ニ發生セルモノ 59 例。四肢ニ發生セルモノ 19 例。軀幹ニ發生セルモノ 7 例。陰莖龜頭ニ發生セルモノ 6 例。陰囊ニ發生セルモノ 2 例。其他ノ部位ニ發生セルモノ 16 例ヲ算セリ。Lozes ノ統計ニヨレバ 52 例ノ皮角中 15 例ハ頭部。8 例ハ顔面。18 例ハ四肢。8 例ハ軀幹。3 例ハ陰部ニ發生セルヲ見ル。Erasmus wilson ハ 90 例ノ皮角ニ就テ 48 例ハ頭部。4 例ハ顔面。4 例ハ鼻部。3 例ハ四肢。6 例ハ背部。5 例ハ陰部。9 例ハ軀幹。11 例ハ其他ノ部位ニ發生セルヲ見タリ。即チ頭部及ビ顔面ニ發生スルモノ多ク四肢軀幹陰部之ニ次グ。余ノ例ハ顔面殊ニ鼻部ニ發生シタルモノナリ。

皮角ノ數ニ關シテハ孤立性ナルモノアリ或ハ多發性ノモノアリ。Lewin ハ一患者ニ就テ 16 箇。Lebert ハ 12 箇。Hesch ハ 8 箇。Ingrassis und Hildanus ハ 16 箇ノ皮角ガ多發セル例ヲ報告セリ。就中 Mansuroff ハ 18 歳ノ女子ニ就テ大小 133 箇ノ皮角ヲ有セシ例ヲ報告セリ。余ノ例ハ 2 箇ノ廣キ基底ヲ有スル皮角ガ互ニ相接シテ生ジタルモノニシテ、尙ホ顔面ノ他ノ部位殊ニ左外眼角ノ附近ニ皮角初期ノ像アルヲ見タリ。

從來皮角ニ關スル報告例ヲ見ルニ、歐洲各國ニテハ其全數 200 例ヲ算スルモ、本邦ニ於テハ其報告例甚ダ稀ニシテ、明治 39 年皮膚科學會ニ於テ笹川氏ガ報告シタル例ヲ嚆矢トス。此ノ例ハ左側乳房ノ外縁ニ發生セル乳頭大ノ皮角ナリキ。尙ホ岡村氏ハ同側乳房ノ右方約 3 糎ノ部位ニ同ジク乳頭大ノ皮角ヲ見タリト云フ。爾來僅カニ十數例ノ報告アルニ過ギズ而モ本例ノ如キ稀有ナルモノハ其報告例ヲ見ズ。

(4) 成長及ビ轉機。

皮角ハ普通ハ徐々ニ成長スト雖モ、時トシテ短時日ノ間ニ急ニ増大スルモノアリ。通常 2 乃至 3 糎ノ高サニ達スルニハ、1 箇年ヲ要ス。Dubreich ハ迅速ニ成長スルモノ 7 例ヲ舉ゲ何レモ 2 乃至 3 週日ニシテ 6 乃至 7 糎ニ達セルモノヲ報告セリ。又 Pick ハ 8 箇月間ニ 9 糎ノ成長ヲ遂ゲタル皮角ノ 1 例ヲ見タリト云フ。余ノ例ハ其成長比較的徐々ニシテ 1 箇ハ約 2 箇年半ニシテ、其高サ 2,5 糎。1 箇ハ約 10 箇月ニシテ、其高サ 1,8 糎ニ達セルヲ見タリ。

皮角ノ轉機ニ關シテハ動物ノ角ノ如ク一程度ノ大サニ達シテ自然ニ脱落シ然ル後再發ヲ反覆スルモノアリ。即チ Marcus ハ 3 例ノ皮角ニ就テ何レモ再發シタル例ヲ報告セリ。又手術後殘存セル基底部分ヨリ屢々再發スルモノアリ、而シテ是等再發ハ多クハ 1 箇年後ニ來ルモ、Sammering ハ週期的ニ再發セシ例ヲ見、Schauffard ハ 4 乃至 5 週ニシテ再發セシ例ヲ見タリ。皮角ヲ根治的ニ切除セル後ニ屢々該部ニ癌腫及ビ上皮腫ヲ發生スル事アリ。Lebert und Birlloth 等ハ何レモ皮角ノ手術後ニ於テ癌腫ノ發生ヲ見タリ。就中 Lebert ハ皮角ノ 12% ニ就テ上皮癌ノ發生ヲ見タリト云フ。

(5) 症候、診斷及ビ療法。

皮角ノ初期ハ疼痛又ハ認ムベキ困難症ヲ缺如セルモ、漸次成長スルニ從ヒ器械的ノ刺戟ニヨリ局所竝ニ其周圍ニ輕度ノ疼痛ヲ惹起スル事アリ。又其成長ニ伴ヒ重サヲ感ズルニ至ル。多發性ノ場合ハ生殖不能ノ原因トナリ、搔痒感甚シキ際ハ、惡疫質ニ陷ル事アリ。即チ Hildanus ハ若キ女子ニ多數ノ皮角ガ背部及ビ四肢ニ發生セル例ニ就テ、何等認ムベキ原因ナクシテ、惡疫質ニ陷リ遂ニ死亡セル例ヲ見タリト云フ。又 Cruveilhiers ハ下肢ニ 1 乃至 1,5「ツオル」ノ長キ皮角 5 乃至 6 箇ヲ生ジタル例ニ就テ、歩行不能ヲ來シタルヲ見タリト云フ。

皮角ノ診斷ハ外形、色調、硬度等ノ特異ノ徵候ニヨリ甚ダ容易ナリ。

療法ニ關シテハ、自然ニ脱落シテ治癒スルモノアルモ、再發ヲ來スヲ以テ手術的ニ皮角ヲ其基底部分ヨリ深ク切除スルヲ以テ根治療法トス。尙ホ切除セル創部ハ硝酸銀ニテ腐蝕スルモ可ナリ。

二 皮角ノ成因。

皮角ハ皮膚ノ角質ノ異常増ニヨル疾病ニシテ其成立ニ關シ種々ノ臆說アリ。

- (1) 高年者ニ發生スルモノ多キヲ以テ一種ノ腫瘍ト見做ス說。
- (2) 多發性幼年性皮角ノ出現スル事實ヨリ先天性ノ母班ト同様ニ考フル說。
- (3) 傳染性基礎ノモトニ發生スト言フ說。即チ Lewin ハ所謂微毒性皮角ヲ是認セリ。又淋毒ニ原因スルモノアリト云フ、但シ淋菌ノ直接作用ニ非ラズシテ其毒素ノ作用ニヨリ皮角ヲ發生スト云フ說。
- (4) 器械的竝ニ化學的ノ刺戟ニヨリ發生スト云フ說。

等アリ而シテ其發生ハ健全ナル皮膚ヨリ或ハ母班、乳嘴瘤、囊腫、粉瘤腫、上

皮腫，肉腫，狼瘡，癬痕乃至色素性乾皮症等ノ病的組織ヨリ生ズ。而シテ諸家ハ各自其實験例ヲ報告シ居レリ。

之ヲ要スルニ其原因ニ就テハ今日尙ホ不明ナルモ，余ノ例ニ於テハ打撲ガ誘引の原因ニシテ既往黴毒亦之ガ發生ニ原因的關係ヲ有スルモノノ如シ。尙ホ其發生原因竝ニ組織學上ノ検査及ビ皮角ノ形成，構造ニ就テ從來ノ文獻竝ニ余ノ檢索ヲ略述スレバ次ノ如シ。

三 發生原因。

抑モ皮角ハ Wilson ニヨレバ，分泌過剰ナル皮脂腺ヨリ發生スト言ヒ。Klenke ニヨレバ膠着毛髮ノ一部ヨリ形成セラルルモノナリト言フ。v. Franke モ此說ニ賛同セリ然ルニ之等ノ說ハ後日顯微鏡的所見ニヨリテ誤謬タリシコトヲ認メラル。Rindfleisch und Unna ハ陳舊性ノ毛囊ヨリ發生スト稱シ，而シテ氏等ハ老人ノ顔面ノ皮膚毛囊ヨリ小ナル皮角ヲ形成セル例ヲ報告セシモ，之等ハ真正ノ皮角ニ非ザリキ。何トナレバ毛囊ハ單ニ皮角形成ニ偶然關與セル現象ニ外ナラズト認メラル。Spietschka ハ皮脂腺及ビ汗腺ハ屢々皮角ノ形成ニ關與シ之等ノ腺ヨリ分泌セラルル液狀ノ產生物ハ角塊 (Hornmesse) ノ中心部ニ誘導セラルルコトアルモ，斯ル現象ハ皮角形成ニ關シテ必要ナル條件ニ非ズト言ヘリ。Veress ハ毛囊ガ異常ニ角化シ，其擴張セル腔内ヲ充タス角板 (Hornlamellen) ヨリ固有ノ皮角ニ變化セルモノヲ觀察セリ。而シテ氏ハ皮角ヲ分類シテ真正皮角及ビ假性皮角ニ分チ，真正皮角トハ，主トシテ高年者ニ發生シ，其形圓錐，圓柱ノ外觀ヲ有シ，乳嘴狀トナリ，乳頭ノ上部ニハ髓質ヲ包含シ，其尖端ハ凹凸不平ノ小部分ニ分割セラレ，其末端ニ髓質ヲ有スルヲ特異ノ現象トス。而シテ各髓質中ニハ多クノ核ヲ有シ發生ノ初期ニハ完全ナル角ヲ形成セザルモ，漸次角化シテ多數ノ尖銳ナル連峯狀ヲ呈スル角ヲ完成ス。又真正皮角ハ稀ニ幼年性多發性角皮症トシテ幼少ナル女子ニ多發性ニ現ハルル事アリ，恰モ多發性ノ疣ノ如キ狀ヲ呈スル事アリ。又真正皮角ノ異型テシテ Fibrokeratom ナルモノアリ。之ハ屢々老年者ノ頸部，顔面及ビ眼瞼等ニ現ハルル纖弱ナル其長1 糎迄ノ乳嘴狀ヲ呈セル絲狀ノ息肉ニシテ髓質形成ヲ有スルモノアリ。假性皮角トハ其形真正皮角ニ酷似セルモ乳嘴狀ノ構造ヲ有セズ，且髓質ヲ缺如セルモノニシテ，屢々陰部ニ發生シ棒狀，肉狀體ヲ呈シ，甚シク大ナルモノアリ，其他假性皮角ニ屬スルモノトシテ，疣ノ角化セルモノアリ。之ハ其狀真正皮角ニ酷似スルモ概シテ

其構造不規則ナリ。

從來皮角發生竝ニ其組織學上ノ所見ニ關シテハ諸家ノ說區々ニシテ各自其意見ヲ異ニスト雖モ、諸家ノ說ヲ綜合スルニ大體ニ於テ2箇ノ見解ニ歸着ス。即チ皮角ノ發生ハ第一上皮ノ原發増殖ヲ主體トシ、乳頭ノ増殖之ニ隨伴スト言フ說、第二乳頭ノ原發増殖ヲ本態トシ、次デ上皮ノ増殖ヲ來スモノナリトノ說之ナリ。

前者ニ左祖セル諸家ハ Auspitz, Lebert, Bätge, Unna, Dubreullh, Boas, Mitwalsky, Giese, Jastrebow 等ニシテ、後者ニ左祖スルモノハ Rindfleisch, Virchow, Förster, Pick, Berg, Franke, Schöbl, Kutscher, Spietschka, Natanson, Herxheimer, Hildebrand, Ballaban, Lagrange, Ribbert, Hessberg 等ナリ。

今諸家ノ說ヲ略說スレバ次ノ如シ。

(1) 上皮基因說。

Bätge ハ自己ノ經驗例ヲ引證シ、上皮基因說ヲ主張ス。即チ氏ハ66歳ノ男子ノ4週以內ニ皮角ヲ生ジタル例ニ就テ、乳頭ニ全ク變化無キヲ見タリ。又17歳ノ露人ニ發生セル3箇ノ皮角ニ就テ、組織學的檢索ニヨリ該皮角内ニハ結締織ノ存在ヲ認メズ加之角塊ガ表皮細胞ノミヨリナレルヲ見タリ。而シテ乳頭ハ單ニ皮角ノ外側ニ於テ著シク發育セルモ其基部ニハ全ク消失シ居レリト言フ。尙ホ氏ハ他ノ皮角例ニ於テ上皮ガ真皮中ニ突進シテ之ガ爲メ乳頭ハ恰モ鶏眼ニ於ケル如ク扁平狀ヲ呈スルヲ見タリト言フ。Unna ハ Fibrokeratom ノ構造上ヨリ皮角ノ發生ニ就テ上皮基因說ニ左祖セリ。即チ氏ハ Fibrokeratom ハ先ヅ既成ノ小ナル纖維性小結節ノ部分ニ發生機轉ヲ有シ、結節内ノ細胞ガ異常ノ増加及ビ固ク密集スル事ニヨリ周圍ノ角層ハ集團シテ椎狀突起乃至「コルベン」狀トナリ、纖維性結節ノ中心部ニ向ヒ外方ヨリ侵入シ、然ル後漸次表皮細胞ノ増殖ヲ營ミ、之ガ爲メ結締織ハ單ニ他動的ニ延長セラレ長キ結締織匍枝ヲ形成ス。斯クシテ Fibrokeratom ノ成立ニハ纖維性小結節ノ形成ヲ必要條件トシ既成結締織ノ増殖ガ表皮細胞ノ増殖ヲ催進セルモノト説明セルノ士アルモ Unna ハ Fibrokeratom ノ成立ニ開シ上皮増殖ガ主體ナル事ヲ述べ居レリ。Auspitz ハ Unna ノ說ニ賛同シテ陳舊性皮角ニ就テ組織學上乳頭ハ先ヅ始メニ増加セル上皮ノ器械的刺戟ニヨリテ生ゼルモノナル事ヲ見タリ。Boas ハ牛眼ノ角膜ニ生ジタル皮角ノ組織學的所見上角膜ニハ認ムベキ乳頭無クシテ、純粹ノ上皮性構造ヲ有スル

點ヨリ乳頭形成ヲ否定シ、以テ乳頭基因說ニ反對セリ。然ルニ Spietschka ハ同様ノ例ニ於テ皮角ハ明カニ乳嘴狀ニシテ其下部ニ存スル角膜ガ「パンヌス」狀トナリ之等ノ「パンヌス」ハ角膜表皮ノミナラズ結膜ニ乳頭及ビ乳嘴狀ノ増殖ヲ形成シ得ルモノト説明シ、Boas ノ說ニ反對セリ。Mitwalsky ハ 40 歳ノ女子ノ下眼瞼ニ發生セル長サ約 4,2 浬ノ皮角ニ就テ之ヲ檢索シ乳頭形成ヲ認メタルモ之等ノ像ハ結締織中隔ヲ備ヘ、皮角ノ成長ニ必要ナル營養血管ヲ有スル爲メニ生ジタルモノニシテ、完全ナル乳頭ト稱スベキニ非ズトシ、以テ氏ハ Unna, Bätge, Auspitz ノ說ニ賛成シ、更ニ次ノ意見ヲ附加セリ。即チ皮角形成ハ棘狀細胞ガ或病的狀態ヲ呈セル部位ニ、限局性ニ増殖ヲ營ム事ニヨリテ生成セラルト言フ。而シテ棘狀細胞ノ下部ニ存スル結締織ニ向ヒ「コルベン」狀乃至盃狀ノ棘狀細胞集團ノ侵入ニヨリ結締織ハ之ガ爲メ索狀或ハ中隔狀ニ變化シ而シテ表層ノ棘狀細胞ヨリ漸次角化シ始メ、「コルベン」狀棘狀細胞ノ集團ノ中央部ニ進ミ栓狀トナリ、細胞柱ノ基底ノ附近マデ角化ス。而シテ結締織索ニ接セル棘狀細胞ハ角化セズト言フ。

(2) 乳頭基因說.

此ノ說ヲ唱フルモノハ乳嘴狀皮角ノ組織學的所見ニ於テ屢々現ハルル長ク延長セル乳頭、或ハ結締織索ニ重キヲ置キ、是等ノ像ハ真皮内ニ侵入成長セル表皮細胞盃ニヨリテ生ゼル空間狹隘(Raummangel)ノ爲メニ生ジタルモノニシテ、能動的ノ作用ヲ有スル血管及ビ乳頭ノ異常増大ニヨルモノトセリ。Rindfleisch ハ皮角ノ發生ニ關シ皮膚乳頭ガ第一必要條件タルコトヲ主張シ、實際上屢々癬痕上ニ生ゼル皮角例ニ就テ乳頭體ハ皮角發生ノ初期ニ大ナル意義アルモノトセリ。Pick ハ陰莖ノ乳頭角化ニヨル皮角ヲ見テ其本源ヲ乳頭増殖ニヨルモノト見做セリ。Franke ハ粉瘤ニ皮角ノ發生シタル例ヲ記載シ、就中比較的大ナル角ハ皮角ノ尖端迄聳立セル乳頭ヲ有シ、之ニ附隨シテ多クノ小ナル樹枝狀ヲ呈セル乳嘴ヲ有シ、是等ノ乳嘴ハ互ニ擴張セル血管網ヲ備ヘ、皮角ノ周圍ニモ亦乳嘴性増殖アルヲ見タリ。而シテ氏ハ結締織、乳頭及ビ血管ノ増殖ハ皮角ノ成立ニ對シ原發性變化ナリト言ヘリ。Spietschka ハ 7 例ノ皮角ト 2 例ノ角化乳嘴ニ就テ檢査セシニ上皮管ハ正常ノ毛嚢部ヨリ下層ノ深部組織ニ侵入セルヲ見ザリキ。而シテ上皮増殖竝ニ増加セル角塊ハ甚シク増殖セル乳頭ノ上層ニ存スル事ヲ見タリ。

以上二説ノ外其發生ニ關シ折衷説ヲ唱フルモノハ、Herx, Hildebrand ニシテ氏等ハ皮角ノ乳頭構成ニ就テ、單ニ真皮ノ乳頭ノミ之ニ關與スルモノニ非ズシテ、上皮細胞ノ高度ノ新生竝ニ角化モ亦等シク關與スベキモノナリト言ヘリ。而シテ又皮角成立ノ要約トシテ乳頭無クシテ眞ノ皮角ヲ發生スルコトナシトセリ。Kutscher, Borst, Ribbert ハ眞正ノ皮角發生ハ上皮、真皮ノ共同作用ニヨリテ肥厚ヲ構成セルモノナリト言ヒ、上皮結締織何レガ其主體ヲナスカノ疑問ハ小ナル皮角ニ就テ檢スベキ要アリトシ、而シテ斯ル際ニハ常ニ上皮竝ニ結締織モ共ニ能働的作用ヲ營ムモノナリト言ヘリ。

四 皮角ノ形成及ビ構造。

皮角ノ成立關係ヲ精細ニ考究スルニハ古キ皮角ニ就テ研究スル事甚ダ困難ニシテ、且其發生原因ニ關シ確實ナル結論ヲ述ブル事能ハズ。依ツテ比較的幼弱ナル皮角ニ就テ檢查スルヲ要ス。今皮角ノ構成ヲ考察スルニ皮角ハ皮膚ノ或部ニ於テ乳頭ノ上部ニ限局性ノ棘狀疹 (Akantose) 及ビ角化ヲ生ジ、同時ニ真皮ノ増殖ヲ始メ、其表層ノ上皮ハ多少皮膚面ヨリ陸起ス。斯カル期間ニ該部ノ乳頭ハ發育シテ Hyperkeratose ヲ保有スルニ至ル、斯クシテ茲ニ成立セル角板ハ剝離セザルノミナラス、却ツテ其異常粘着性ニヨリ有核質ハ互ニ相重疊シ、乳頭ノ上部ニアル固有ノ角板ハ既ニ早期ニ於テ大ナル無構造ノ細胞ヨリ成立セル垂直ノ配列アリ。之ヲ髓腔 (Markraum) ト稱ス、之等無構造ノ髓質細胞ハ乳頭ノ尖端ヲ包圍スル棘狀細胞ノ壞死、浸潤、變性ニヨリテ生ズ。且始メハ顆粒狀或ハ硬固ナル線狀、纖維狀トナリ、核ハ泡狀トナリテ消失シ、或ハ稀ニハ細胞ノ邊緣ニ排壓セラレ高度ノ扁平狀ヲ呈スル事アリ。後ニハ之等病的上皮細胞ハ甚シク腫脹シ棘ヲ失ヒ其境界明瞭トナリ原形質顆粒モ亦常ニ細小トナル。斯クシテ細胞ハ其大サ3乃至10倍ニ増大シ全ク無構造ノ明瞭ナル邊緣ヲ有スル圓形ノ像ヲ呈スルニ至ル。而シテ之等ノ細胞ハ乳頭ノ頭部ヨリ皮角ノ尖端ニ至ル迄1列乃至數列ニ配列シ屢々續發性ノ變化ニヨリ所々暗黒ナル無構造ノ物質トナル事アリ。中間期ニ至レバ乳頭ハ高度ニ擴張、延長ヲ示シ、真皮ノ血管ハ擴張シ、乳頭體ノ下方ニ於テハ「プラズマ」細胞ノ浸潤現ハレ、乳頭中ニモ達ス。結締織ノ細胞浸潤ハ既ニ早期ニ現ハレ著明ノ變化ヲ認ムル事ヲ得。後ニ角ハ器械的影響ノ結果續發的ニ増加シ狼瘡性結節ヲ呈ス。同時ニ真皮及ビ乳頭ハ外力ノ爲メ屢々出血ヲ來シ、基底部ノ乳頭、結締織ニハ硬固ナル角質ヲ擔フニ至ル。

皮膚表面ニ隆起セル結締組織ハ一時ハ其成長角質ノ内方ニ停マリ然ル後、表皮ノ増殖ト平衡ノ増殖ヲ營ムカ、或ハ表皮ノ増殖ガ結締組織隆起ヨリ著シクナリ、全角質ト共ニ表皮ハ下方ニ向ヒ結締組織ニ對シテ増生セラル、斯クシテ結締組織ハ平等ニ急激ナル増加ヲ營ム所ノ上皮ノ爲メニ壓迫セラレ、真皮、表皮ノ境界ハ皮角ノ兩側ニ於テ隆起スルモ、其中央部ニアリテハ噴火口狀ニ陷凹ス。然ル後漸次其境界ハ水平面ニ一致スルニ至ル。

次ニ皮角ノ發生管養ニ就テハ一定ノ週期、間歇乃至階梯アリ。即チ皮角ヲ垂直或ハ種々ノ方向ニ注目スレバ、下方ヨリ上方ニ向ツテ色調、硬度ノ關係、又ハ核含有量ノ多少等ニヨリ各相違セル點ヲ發見シ得可シ、角化ハ伸展セル乳頭ヲ包圍スル上皮層ニモ、漸次追行シ時ヲ經ルニ從ヒテ高度トナル。延長セル乳頭ノ結締組織ハ後ニ至リテ角塊ノ壓迫ヲ受ケ最後ニ著シク退化ス。皮角ノ發生スルヤ上皮ハ著明ノ増殖ノ結果尙ホ真皮ノ柔軟ナル性質ニヨリテ二、三ノ乳頭ハ敗滅ニ歸ス。基礎細胞列ハ互ニ接シテ活潑ナル上皮萌芽狀ヲ呈シ、上皮細胞ハ増加シ之ニヨリテ成立セル角塊ハ乳頭ノ側方ニ群集シ、其間ニ存スル角柱ノ直徑ヲ増加セシム。其他乳頭間ノ角質ハ上方ニ向ヒ軟化シ、皮角ハ疎トナリ、長徑ヲ増ス。

五 余ノ例ニ於ケル組織學的所見。

皮角ノ組織學的檢査ヲ施シ、其發生原因ヲ研究スルニハ、諸家ノ述ブル如ク既成皮角ノ組織學的所見ハ甚ダ不完全タルヲ免レズ。必ズ皮角發生ノ極初期ニ於テ檢査スルヲ要ス。又既ニ古キ皮角ニ就テノ組織學的研究ハ諸家ノ記載ニヨリ精細ニ盡サレタルヲ以テ余ハ特ニ本患者ニ就テ、左側外眼角ノ附近ニ存セル皮角ノ極初期ト思ハルル前記褐色ノ斑點ニ就テ、組織學的ノ檢査ヲ行ヘリ。即チ該部ノ皮膚ヲ切除シ、其小片ヲ直ニセンカー氏液ニテ固定シ、「ツエロイザン」包埋法ニヨリ皮膚面ニ、垂直ニ、9乃至10「ミクロン」ノ切片ヲ作り、「ヘマトキシリン」「エオジン」ノ重染色及ピロウギーソン氏染色ヲ施シ檢査ニ供セリ。而シテ此組織的所見ヲ健康ナル該部ノ皮膚ト對照センガ爲メ、58歳ノ男子ニ就テ同側同部位ノ組織的標本ヲ作製シテ比較檢査セリ。

健康ナル皮膚組織ノ所見。

角質ハ數層ノ極メテ稀薄ナル角板ヨリ成リ。其層厚平均 11,6「ミクロン」、透明層ハ幽微ニシテ幽カニ之ヲ見ル事ヲ得、顆粒層ニ著變ヲ認メズ、マルヒギー氏層ノ細胞及基礎細胞ハ其配列稍正常ニシテ核及皮原形質ハ正常ノ像ヲ示ス。其層厚平均 49,5「ミクロン」アリ乳頭ハ其突隆緩ニシテ結締組織亦異常ヲ認メズ（第一圖參照）。

本患者ノ皮角初期ニ於ケル組織學の所見。

角質ノ肥厚増殖ハ著シクシテ、角板ハ相重疊シ恰モ薄紙ヲ積ミ重ネタル狀ヲ呈シ、其層厚37,0「ミクロン」ニシテ、健康皮膚ノ3倍強ナリ。透明層ハ明カニ認ムル事ヲ得ズ。顆粒層ハ著シク「ヘマトキシリン」ニ濃染シ、其層厚9,7「ミクロン」ニシテ明カニ角質及ビマルビギー氏層ト判別シ得。特ニ此層内ニ見ユル細胞ハ著シク膨大シ核ハ泡狀ニ膨脹シテ其周圍ニハ細胞ヨリ變質セル物質ニテ包圍セラレ總テ角化ノ移行像ヲ示ス。マルビギー氏層ハ異常ノ増殖ヲ示シ、棘狀細胞ハ不規則ニ數列ニ配列シ其形圓形或ハ類圓形ニシテ核ハ泡狀トナリ細胞及ビ核ノ大サ尋常ノ3乃至5倍ニ達シ、棘狀突起モ消失セル部分アリ。尙ホ細胞ハ其原形質ニ所々色素顆粒ノ沈着ヲ見ル又基礎細胞ハ色素顆粒沈着著明ニシテ細胞ノ配列ハ稍不規則ナルガ其形何レモ圓柱狀ヲ呈シ、「ヘマトキシリン」ニ濃染ス。マルビギー氏層厚ハ平均67,5「ミクロン」ニシテ尋常ノ約1倍半強ナリ。次ニ真皮乳頭層ハ結締組織ノ發生健康皮膚ニ比シテ格別ノ著變ヲ示サズ。又結締組織細胞ノ浸潤ヲ認メズ。毛細管異常ノ擴張ナシ。然ルニ乳頭ノ形ハ稍健康狀態ト異ニシテ、真皮ニ向ヒ増殖セルマルビギー氏層ノ排壓ニヨリテ其形圓柱狀ヲ呈セルモノ多シ。尙ホマルビギー氏層ノ比較的薄キ部分ニハ之ニ接セル乳頭層ノ結締組織纖維ハ明カニ認メ得ルモマルビギー氏層ノ著シク肥厚増殖セル部分ニ接セル乳頭層ノ結締組織纖維ハ變質セルモノノ如シ。斯クテ乳頭ハ皮膚ノ表面ニ向ヒ突入ノ像ナク却テ基礎細胞ニ接セル部ニ於テ變質スル像アルヲ認ム。

以上ノ所見中著明ノ像トシテ角層ハ著シク發達シテ、毛幹ヲ圍繞シ、其増殖ノ爲メ顆粒層及ビマルビギー氏層ヲ壓迫シ、之ガ爲メ該兩層ハ深ク真皮内ニ陷凹セル像ヲ示ス、又顆粒層ハ著シク肥厚シ且緻密ニシテ明カニ角化セル移行像ヲ認ム（第二圖及ビ第三圖參照）。

以上ノ組織學の所見ニヨリテ皮角ノ發生ヲ考察スルニ、皮角發生ノ初期ニ於テハ乳頭ニハ何等ノ自働的變化無ク單ニ表皮細胞ノ増殖ニヨリ排壓ヲ受ケ其形狀ニ變化ヲ來スニ過ギズ。之ニ反シテマルビギー氏層及ビ顆粒層ハ異常ニ増殖シ其層厚著シク肥厚シ、特ニ棘狀細胞ハ膨大シテ變質ヲ始メ顆粒層ニ於テ著シク角化シ始ム。斯クシテ角層ノ増殖スルモノト認ム。而シテ表皮ノ異常増殖ノ結果成立セル皮角ハ其増大スルニ從ヒ、乳頭層ハ續發的ノ變化ヲ惹起シ、乳頭ハ其形圓壩狀ニ變化シ、其部ノ結締組織ハ索狀或ハ中隔狀ニ變化シ、遂ニ皮角ノ髓ヲ構成シ、古キ皮角ニ於テハ之等ノ乳頭竝ニ結締組織ハ器械的ノ刺戟ニヨリ表皮細胞ノ集團ト共ニ角質内ニ相錯走スルニ至ル。即チ余ノ組織的所見ヨリ見レバ表皮基因說ヲ以テ正當ナル解釋タル事ヲ唱ヘントス。尙ホ最後ニ皮角ノ誘引の原因ニ就キテハ諸氏ノ說アリト雖、余ノ例ニ就キテハ微毒性體質ニ加フルニ反覆セル器械的刺戟其主因ヲナシタルモノト考ヘ得ベシ。

摘 要.

(1) 皮角ハ敢テ稀有ナル疾患ニ非ズシテ歐米ノ文獻ニ徴スルニ其報告例 200 有餘ヲ算スルモ、本邦ニ於テハ僅ニ 20 例ニ滿タズ。主トシテ高齢ノ男子ニ徐々ニ發生スルモノ多シ其大ナルモノハ長サ 30 釐ニ達セルモノアリ。余ノ例ハ 77 歳ノ男子ノ顔面鼻部ニ發生セル 2 箇ノ極メテ奇觀ヲ呈セル皮角ニシテ、1 箇ハ約 2 箇年半ニシテ其高サ 2,5 釐、1 箇ハ約 10 箇月ニシテ 1,8 釐ニ達シ、周徑ハ何レモ 5 釐ナリ。其色調ハ黃褐色ニシテ、硬度ハ軟骨ヨリ稍柔軟ナリ。形ハ圓柱形ヲ呈シ、尖端ハ不規則ニ分歧シ峻峰狀ヲ呈ス。特ニ興味アルハ同側ノ眉毛部ノ外縁ニ於テ外眼角ノ附近ニ褐色斑點ヲ呈セル皮角初期ノ像ヲ認ム。

(2) 皮角ノ發生原因ニ就テハ其說區々ナリト雖、就中上皮基因說及ビ乳頭基因說ヲ以テ主要ナル學說トス。余ノ例ニ於ケル組織學的検査ニヨレバ皮角ハ主トシテ棘狀細胞ノ病的増殖ニヨリ角化ヲ來スモノニシテ、其初期ニ於テハ乳頭ニ何等ノ變化ヲ認メズ。即チ表皮基因說ヲ以テ正當ナル解釋ナル事ヲ唱ヘントス。

(3) 皮角ノ誘引的原因ニ就テハ又諸種ノ原因アリト雖、余ノ例ニ於テハ既往ノ微毒竝ニ反覆セル輕度ノ外傷ガ刺戟トナリ、表皮ニ病的變化ヲ惹起シ表皮細胞ノ異常ノ増殖ヲ誘發セルモノト思考ス。

附 圖 說 明.

第一圖. 顔面左側外眼角附近ニ於ケル健康ナル皮膚ノ組織 (Zeiss ocular 4. obj. E.)

- | | |
|-------------|-------------|
| a ハ 幽微ナル角質層 | b ハ マルビギー氏層 |
| A ハ 表皮 | B ハ 眞皮 |
| | C ハ 毛幹 |

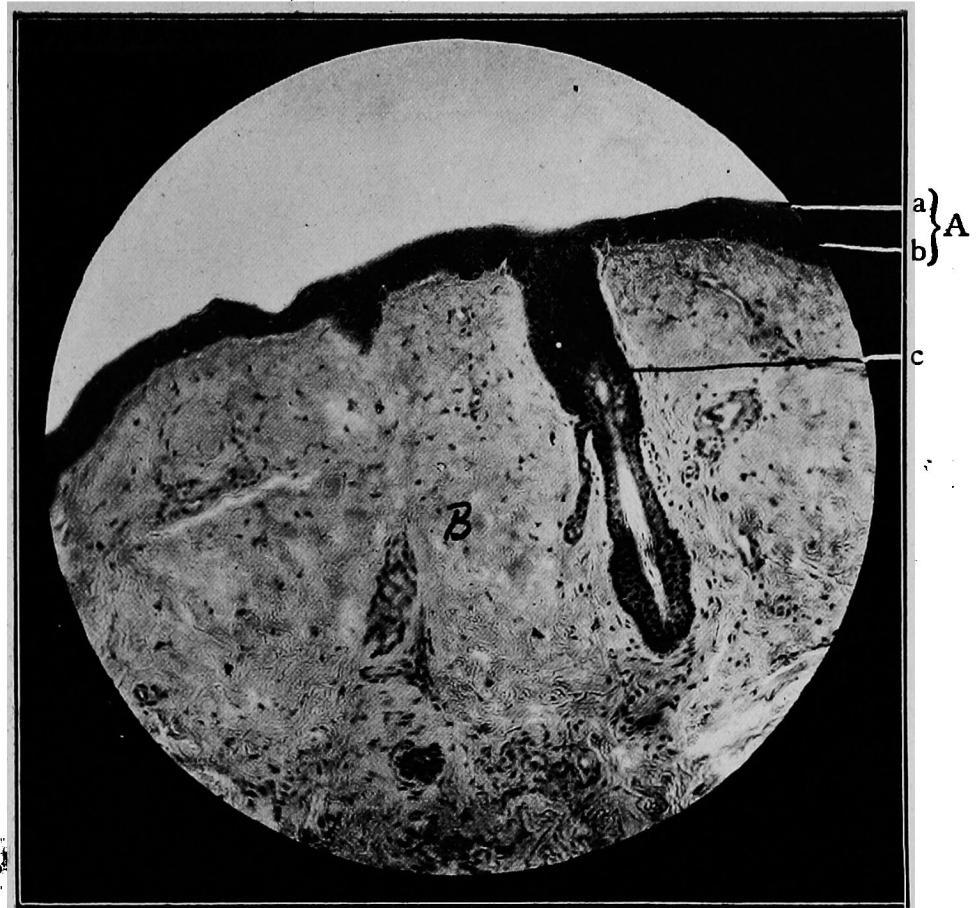
第二圖. 皮角發生初期ノ皮膚組織 (Zeiss ocular 4. obj. E.)

- | | |
|-----------------|--------------------|
| A ハ 表皮 | B ハ 眞皮 |
| a ハ 高度ニ増殖セル角質層 | b ハ 厚キ顆粒層 |
| c ハ 肥厚セルマルビギー氏層 | d ハ 毛幹及ビ毛幹ヲ圍繞セル角質層 |
| e ハ 乳頭 | f ハ 毛幹 |

第三圖. 第二圖 d 附近ヲ擴大セル像 (Zeiss ocular 4. obj. C.)

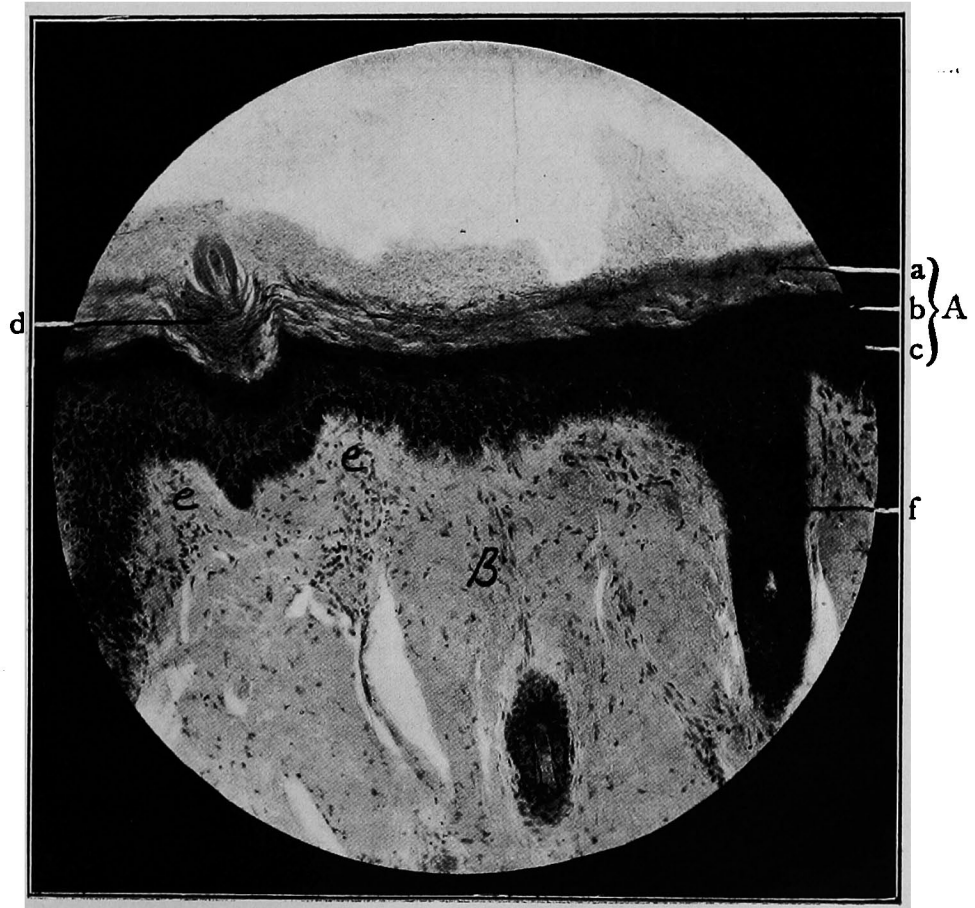
- | | |
|---------------------------|--------|
| a ハ 毛幹ヲ圍繞セル角板 | b ハ 毛幹 |
| c ハ 顆粒層ニ於ケル變質細胞及ビ角化ノ狀態ヲ示ス | |
| d ハ マルビギー氏層 | e ハ 乳頭 |

第一圖



廣田論文附圖

第二圖

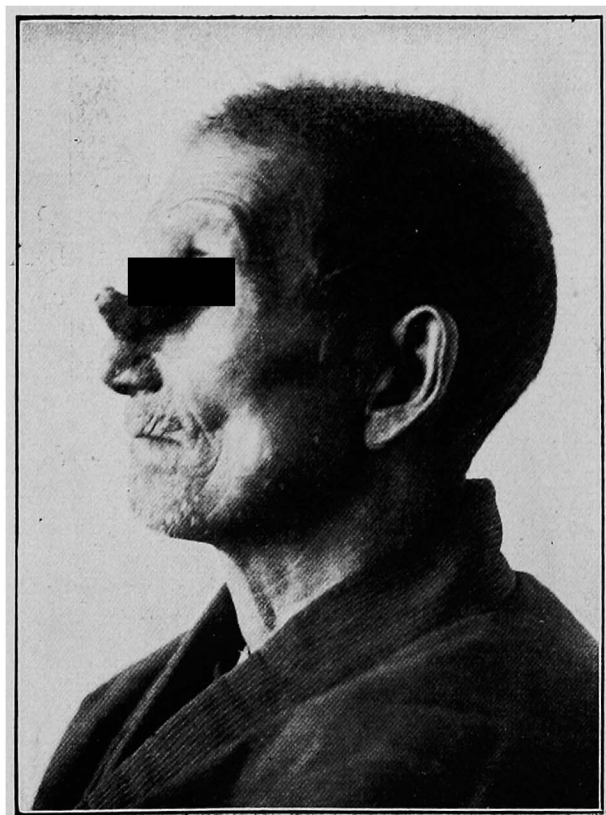


第三圖

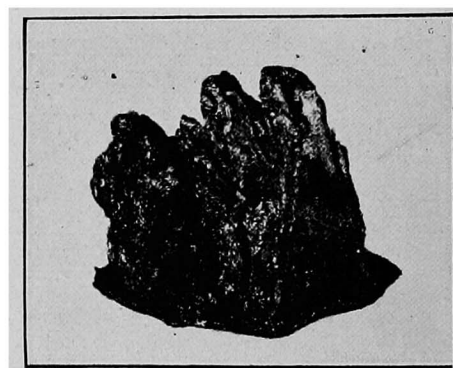
廣田論文附圖



第四圖



第五圖



自然大

文 獻

- 1) Auspitz, Über das Verhalten der Oberhaut und Papillarschicht, Archiv f. Dermt. u. Syph., 1870.
- 2) Boas, Centralblatt für allg. Path. u. Pathol.-Anat., Bd. VIII, Nr. 8 u. 9.
- 3) Bätge, Zur Kasuistik multipler Keratosen. Dtsch. Zeitschr. für Chir., 1876.
- 4) Billard, Journal des Maladies Cutanees et Syphil., 1897, S. 413.
- 5) Borst, Die Lehre von den Geschwulsten. Wiesbaden, 1902, Bd. II.
- 6) Bergh, Fälle von Hauthörnern. Archiv. f. Dermat. u. Syphil., 1873.
- 7) Dubreuilh, III intern. Kongreß für Dermatologie und Syphilis in London, 1893.
- 8) Franke, Über das Atherom nebst einem Auhang: Über Hauthörner Archiv. f. klin. Chir., 1887, Bd. XXXIV.
- 9) H. V. Hebra, Die krankhaften Veränderungen der Haut. Braunschweig, 1884.
- 10) Herxheimer und Hildebrand, Ergebnisse der allgemeinen Pathologie und Lubarsch-Ostertag. VII. Jahrg. 1900—1901, S. 364.
- 11) Joseph, Lehrbuch der Hautkrankheiten, 1900.
- 12) Kaposi, Lehrbuch der Hautkrankheiten, 1899.
- 13) Lesser, Lehrbuch der Hautkrankh., 1900.
- 14) Maassurow, Klinische Sammlung f. Dermat. und Syphilographie, autreferat. Monatsch. f. prac. Derma, 1890.
- 15) Marcuse, Zur Kenntnis der Hauthörner. Archiv. f. Derm. u. Syph., 1902, Bd. 60.
- 16) Mitwalsky, Beitrag zur Kenntnis der Hauthörner der Augenadnexa. Arch. f. Derm. u. Syph., 1894.
- 17) Natauson, Cornu Cataneum Palpebrae. Arch. f. Derm. u. Syph., 1899.
- 18) Neisser-Jadassohn, Hautkrankheiten Schwalbe-Epstein. Handbuch der praktischen Medizin, 1901, III, 2.
- 19) Obtulowicz, Ein Fall von Hauthorn. Archiv. f. Derm. u. Syph., 1899.
- 20) Pasiui, Sulla istologia e sulla Patogenesi del Corni cutaneo. Giornale italiano delle malattie veneree e della pelle, 1902, Fasc. 3.
- 21) Pick, Zur Kenntnis der Hauthörner. Arch. f. Dermt. u. Syph., 1875.
- 22) Philip, Zur Histologie des Hautorns. Monatsch. f. Pract. Dermat., Bd. 39, Nr. 11.
- 23) Rindfleisch, Lehrbuch der pathologischen Gewebslehre, 1875.
- 24) Ribbert, Geschwulstlehre. Boun, 1904.
- 25) Schöbl, Über einige seltene Keratome des Auges. Verhandlung der böhmischen Akademie, 1. Jahrg, II Klasse, 1892.
- 26) Spietschka, Zur Histologie des Cornu Cutaneum. Arch. f. Derm. u. Syph., 1898.
- 27) Thibierge, Corne epitheliomateuse tres volumineuse de la region frontale chez une agée. Annales de dermat, 1898.
- 28) Unna, Das Fibrokeratom. Dtsch. Zeitsch. f. Chir., 1880.
- 29) Vorläufige Richtigstellung der gegen meine Arbeit über Cornua Cutanea gerichteten Angriffe Mitwalsky. Arch. f. Derm. u. Syphil, 1894.
- 30) Histologie der Haut. Berlin, 1894.
- 31) 皮膚病學 (土肥愛藏博士著).
- 32) 皮膚病學 (筒井八百珠博士著).
- 33) 明治 39 年 6 月, 皮膚科學雜誌.
- 34) 大正 12 年 3 月, 京都皮膚科學會雜誌 (日高誠一氏).
- 35) 大正 11 年, 皮膚及泌尿器科雜誌, 第 22 號 (陰莖皮角ノ一例, 松田菊雄氏).